

予算額

4,874,305 円

トップアスリートによる巡回指導

巡回指導先団体総数	5 団体			
巡回指導先団体内訳	総合型クラブ	スポーツ少年団	学校	その他
	0 団体	1 団体	3 団体	1 団体

トップアスリート総数	3 名			
トップアスリートの内訳 (大会出場別)	オリンピック	国際大会	全国大会	その他
	名	1 名	1 名	1 名

アシスタントコーチ総数	3 名
-------------	-----

指導種目	バスケットボール、テニス
------	--------------

◆効果高めるための工夫や取組など

- ・ バスケットボール:小学生の既存のチームへの指導は、基礎練習を楽しみながら出来るようにファンゲームを取り入れ、1対1、2対2、3対2など徐々にチームプレーへと発展させ、最後には必ず試合を行い、その日練習したものを試合の中で活かすことが出来るように進めていた。初心者対象のバスケットボール教室に関しては、ゲームを多く取り入れ、バスケットボールを楽しむことを最優先に指導をしていた。
- ・ テニス:初心者対象の指導はゲームをたくさん取り入れて、自然とストレッチ、準備体操が出来る仕組みにして、細かいフォームよりもミニテニスを導入し、楽しみながら競い合う練習方法を取り入れていた。中学テニス部対象の指導は体の軸、バランスとステップ(足の使い方)の大切さを学ばせ、目標を決めて打てるように取り組んでいた。

◆成果と課題

[成果]

- ・ 運動嫌いの子どもがスポーツ教室の日を楽しみにしてくれるようになった。
- ・ 1つのスポーツしか興味がなかった子どもに他のスポーツへの幅をもたせた。
- ・ 相手がいるから楽しいスポーツが出来るということを学べた。
- ・ 練習と試合は別のものでなく、つながっていることを丁寧に指導したおかげで、練習や1つ1つのプレーを大切に行うようになった。
- ・ 部活動の生徒達には、トッププロの練習を間近に見ることで、練習意欲や試合の目標意識を高めることができた。

[課題]

- ・ 中学テニス部を指導する際に、部員が多く、時間と場所が制限された中では、全員を十分に指導することが難しく、試合などの実践を行う時間があまりとれなかったため、中学生には試合を通じたメンタルトレーニング法も経験させたかった。

地域課題解決に向けた取組

	取組の名称	3B体操				
	趣旨・目的	親子で参加できる運動プログラムを設定し、30代、40代の子育て世代の地域活動への参加を促す。				
	内容	ボール、ベル、ベルダーの用具を運動の助けとして使用しながら、全ての動きに合わせて集団で楽しく行う健康体操。				
	対象者	30代、40代の子育て世代の親と子ども	参加人数／回	20名	実施回数	8回
1	効果を高めるための工夫や取組など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 毎回出席を取り、継続して取り組んでいけるよう声かけを行った。 ・ 少しずつ有酸素運動を取り入れ、音楽に合わせて楽しく体を動かし、ペアを作って運動させるなど仲間意識を持たせた。 				
	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 普段スポーツに取り組むことの少ない方も、地域活動の中で自然にスポーツを続けていくことが出来た。 ・ 継続して3B体操を続けたいという声が多かった。 ・ 軽く汗を流すことで日常の疲労感が軽減され、心身ともにバランスが良くなった。 				
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家事を済ませて参加する夜の時間帯は、母親にとってはベストだが、子ども達にとっては遅くなってしまうので調整が必要。 ・ 現在、3B体操を行っている教室が沖縄県にはほとんどないため、いろんな地域に3B体操が普及して欲しい。 				

	取組の名称	フラダンス				
	趣旨・目的	親子で参加できる運動プログラムを設定し、30代、40代の子育て世代の地域活動への参加を促す。				
	内容	ハワイの伝統的な歌舞音曲であるフラの動きの意味や動作を学びながら、親子間や地域の人とのコミュニケーションを図る。				
	対象者	30代、40代の子育て世代の親と子ども	参加人数／回	20名	実施回数	8回
2	効果を高めるための工夫や取組など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最初にこれから習うダンスの歌詞の意味などを理解してもらいフラの動きを表現しやすいようにした。 ・ 毎回出席を取り、継続して取り組んでいけるよう声かけを行った。 ・ 鏡がないので窓に移る自分の姿勢を確認させた。 				
	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 普段スポーツに取り組むことの少ない方も、地域活動の中で自然にスポーツを続けていくことができた。 ・ フラダンスの自然なゆっくりとした動きは、かなりの筋カトレニングになった。 				
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 月2回ということで、前回習ったダンスを忘れてしまいがちだったので、回数を週1回に増やした方がいいという声が多かった。 				

	取組の名称	エイサー(太鼓エイサー)			
	趣旨・目的	親子で参加できる運動プログラムを設定し、30代、40代の子育て世代の地域活動への参加を促す。			
	内容	体育の授業にも取り入れられている沖縄伝統エイサー。屈伸、回転、跳躍、バランスなど様々な運動要素を含んでおり、スポーツとしても親しまれている。このエイサーを通して親子間や地域間の交流を深める。			
	対象者	主に県外出身の家族、30代、40代の子育て世代の親子	参加人数/回	40名	実施回数 8回
3	効果を高めるための工夫や取組など	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループを3つに分けて(低学年、中学年、高学年)それぞれの年代に適した方法で分かりやすく指導していた。 ・ 毎回出席を取り、お互いにコミュニケーションを取れるように名札を付けて練習を行った。 ・ 最後に成果を見せ合う発表会の場を設定した。 			
	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 広い地域から参加してくれたため、地域間の交流が深まった。 ・ 青年会の若者の熱心な指導で楽しみながら取り組むことができた。 ・ 将来、青年会に入ってエイサーをしたいという地域の子どもの意見もあった。 ・ 最後に発表会をすることで、子ども達そして保護者が通った4ヶ月間のエイサー練習においてそれぞれ達成感を得られた。 			
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼稚園児や低学年の参加者も多かったため、2時間集中力を維持させるには、保護者との連携を深めていくことが必要だと感じた。 			

小学校体育活動支援

派遣先学校総数	1 校
---------	-----

コーディネーター総数	1 名
------------	-----

◆効果を高めるための工夫や取組など

- ・ 月毎に対象学年を絞り込み、1単元を継続して指導できるようにした。一方で、空き時間は対象学年以外でも自由にコーディネーターを使えるようにして、単元の中でワンポイントだけでも技術指導を行えるようにした。
- ・ 学級担任の指導力によって、コーディネーターをメインにして指導したり、サポートに回したりと、授業の中でコーディネーターを有効利用出来るようにした。
- ・ コーディネーターがメインで入る授業では、なるべく指導書に載っていないオリジナルの内容を紹介出来るようにした。
- ・ 授業全体を通して、“座る時間”を短くし、運動量を増やすとともに、個々の能力によって運動量に差が出ないよう、グルーピングやルールを工夫した。

◆成果と課題

〔成果〕

- ・ 先生方の負担が減ったという声が多かった。
- ・ 単元を通じて指導することで、導入から発展までの組み立て方を見せることができ、職場の先生方からも参考になったという声が出ていた。
- ・ 空き時間を利用したワンポイント指導でも、色々なバリエーションの練習やゲームを紹介することで、授業に変化が出て子ども達の意欲が高まったという声が出ていた。
- ・ 能力差をカバーし、すべての生徒の運動量を確保するよう工夫したことで、運動の苦手な子どもも授業ではなく、休み時間などにも積極的にスポーツをするようになった。

〔課題〕

- ・ 授業参加への意欲の落ちている学年では、生徒指導の方にコーディネーターが時間を割かれてしまい、肝心の授業を予定通りに進めることが出来ないことがあった。今後は先生方と役割分担を明確にして、効率よく授業を進めていく工夫が必要である。
- ・ 生徒が主体的に授業に取り組めるように授業内容も興味をひくものに改良していく必要がある。

本事業全体の成果と課題

【成果と課題】

〔成果〕

- ・ 学校や運動部活動、地域それぞれでいい環境が生まれ、今後も継続して実施して欲しいとの声が出たことが何よりの成果である。
- ・ 専門の知識を持ったアスリートやコーディネーターを派遣したことで、子ども達にスポーツの楽しさを伝えることができ、同時に夢を与える事ができた。
- ・ 教員やクラブの指導者の指導力向上につながった。

〔課題〕

- ・ 一定の成果ができたものの、本事業についてはまだまだ認知されていないのが現実である。また、自主事業として継続していくために、安定した収入を得るためのシステムもまだまだ確立されていないので、今後は自主事業化に向けて体制を整えることを視野に入れ、各団体と更なる連携を深めていきたい。